

北鎌倉台峯トラスト 北鎌倉の景観を後世に伝える基金



会報

2021年10月 NO.44 解散記念・最終号

感謝のうちに

<雪に覆われた台峯山頂付近>

(2018年1月23日 望月眞樹理事撮影、本誌 P12、写真1)



当会報は春・秋の発行が多いので、冬景色が巻頭を飾ることはあまりありませんでした。最終号として次の新出発を目指し、あえて季節先取りの新春景色としました。(編集者)

<目次>

■ 理事長ご挨拶 ーお礼とお願い	2	■ 台峯の四季	12
■ 活動の歴史	3	■ 皆様からのご寄稿文	14
■ 「台峯を歩く会」を振り返って	6	■ 「台峯を歩く会」と関連活動の報告	19
■ 「山の手入れ」を振り返って	7	■ 鳥の名前 ㊦	21
■ 台峯の自然の現状	8	■ 台峯の周辺 ㊧	23
■ 当基金を支えて下さった方々(1)	10	■ 緑の洞門	24
■ 当基金を支えて下さった方々(2)	11		

●理事長ご挨拶●……………

お礼とお願ひ

—NPO 法人から任意団体へ

……………

○これまでの当基金へのご支援にお礼

六国見山頂から見渡すと鎌倉は緑が広がっていますが、航空写真などで見ると実は開発によって稜線に僅かに残るのみです。

当号の「活動の歴史」にもあるように、当基金は希少となった緑の台峯を保全すべく、まず任意団体として発足し、その後特定非営利活動法人(NPO法人)を組成しました。

やがて市が台峯緑地の購入と保全を決定し、当基金の大きな目標は一先ず達成された訳ですが、その後も周辺緑地の保全のため皆様から頂いた浄財を市へ寄付するとともに、「台峯を歩く会」や「山の手入れ」、市との協議など日頃の活動を行うことにより、台峯の実質的な保全に努めてきた次第です。

このほど台峯が公園として全面開園する運びとなり、これを区切りとして、当基金を NPO 法人としては解散し、任意団体として再発足することとなりました。NPO という法人として権利義務の主体となることはメリットもあるのですが、登記、会計、県への報告、法人税対応、理事会・総会の開催等かなりの負担があるからです。むしろ今後はその力を「歩く会」や「手入れ」、市との協議等の本来的な活動に費やしたいと考えます。

このように基金が成功裏に任意団体へ変身できるのは、資金面での今は無い「みどりショップの会」や、カレンダー写真での川上克己、池英夫両氏、またお名前を一々挙げられませんが、会員はじめ皆様から永年多大なご支援、ご協力を頂いて活動できたお陰です。ここに厚く御礼申し上げる次第です。有難うございました。

○これからの活動とお願ひ

しかし、とりあえず開発から守られ、公園になったからと言って、実質的な保全が将来にわたり全うされるのかは予断を許しません。一般の方も招いての草刈りなど日頃の手入れや啓蒙活動は勿論、池の水量減への対応や散策路の当初予定通りの開通につき市との接触が引続き必要と思われれます。

従って、解散した NPO 法人の後継者として新たに任意団体が発足の運びですが、皆様にはこの団体へのご支援、ご協力を期待しております。よろしくお願ひ申し上げます。

○林監事への感謝

ところで、NPO 法人は世に沢山存在しますが、必ずしも全てにおいて適正な運営がなされている訳ではないようです。

当基金は公認会計士の林雄一郎先生が NPO 法人発足前から永年監事を務めて下さり、ご多忙中を毎月理事会にお越しの上、会計のみならず業務運営全般についても監査や助言をなさって下さいました。お陰様で法や定款を守り、NPO 法人として恥ずかしくない運営を行って来ることが出来たのです。折角の日曜日を毎月潰されていた訳で、ご家族には大変申し訳ありませんでした。

よって、この度基金を代表して私より花束を添え感謝状をお贈り申し上げます。大変有難うございました。感謝の念で一杯です。なお、幸いなことに林先生は後継の任意団体にも参加して下さいとのことでした。

理事長 出口 克浩



<感謝状贈呈 2021/10/3 山ノ内公会堂にて

写真:小谷 一夫>

.....

活動の歴史 NPO 法人時代を中心に

.....

【台峯地区の宅地開発問題】

1976年5月野村不動産が都市計画法に基づいた台峯地区の宅地開発計画「(仮称)野村鎌倉台峯宅地」を公表した。開発面積約27ha、計画戸数80戸

事業はその後中断、改めて1996年8月土地区画整理法に基づく区画整理事業として準備委員会を設立、2001年1月開発届出、同年3月その内容が公表された。開発面積約28.7ha、計画戸数576戸

【当基金の設立】

こうした開発の流れの中であって、「北鎌倉の景観を後世に伝える基金」は、台峯緑地の保全活動を積極的に展開してきた「台峯の緑を守る会」のメンバーを中心に、作家で精神科医の なた いなだ氏を会長に2001年5月NPO 法人として組織化された。

この「台峯の緑を守る会」は、市が定めた「みどりの基本計画」で中央公園の拡大域と位置づけられている台峯地区について、地権者が1998年7月に開発手続きを開始したことに危機感を持ち1998年10月NPO 法人化を目指した任意団体「北鎌倉の景観を後世に伝える基金」を立ち上げた。

これが当会の前身であり、それ以降私たちは台峯の保全に向けて多くの人にその素晴らしさを伝える活動を行ってきた。

【緑地保全の決定】

こうした運動や活動の結果として、2004年秋に鎌倉市によって台峯緑地の全面保全の

方向性が示され、同年12月には保全が決定。当基金が発足に際して掲げた大きな目標は達成の緒についた。

台峯の保全決定!

2004年12月16日



2004年12月16日鎌倉市より台峯緑地を保全する方針が発表されました。当基金が「里山的実質保全」を訴えてきました台峯緑地の保全の第一歩が踏み出されることになりました。

基本計画に基づく鎌倉中央公園の拡大区域の方針に沿って、平成17年度における想定価格で約60億円以内を目標に、概ね10年間で公有地化を図るための手続きをとる。

以下は鎌倉市のホームページより抜粋

このように鎌倉市は台峯保全の方針を打ち

く市による保全を伝える本誌 No.12, 2005/2>

しかし「台峯の里山的実質保全」と「北鎌倉の自然と人間の共生」の実現には、なお多くの課題を抱えていた。私たちはその後も志を同じくする他の自然保護団体と協力しあい、一步一步足元を確かめながら目標に向かって活動をしてきた。

【主な活動記録など】

2001年5月 NPO法人化

2001年9月 基金のHP 開設

2002年1月23日 日仏映画人のメッセージを市長に手交

小津安二郎を知るフランス映画関係者、パリ市議会議員および山田洋次監督からの、台峯のみどりの保全を訴えたメッセージを石渡市長に手交

2002年4月 みどり債発行の提案

台峯緑地保全の財源として「市民参加型かまくらみどり債」発行を石渡市長に要望。(市は広町緑地の用地取得に「みどり債」発行を決定2003年12月)

2003年~2005年5月 旧小泉邸マンション建設問題

北鎌倉の旧小泉邸は樹木が鬱蒼と茂る広大な敷地(1,200坪)に昭和初期に建設された洋館があり、北鎌倉を代表する景観を呈してきたが、マンション建設のため取り壊された。

当会は建設に反対の意見表明を行う一方、慶應義塾大学等による小泉邸の実測調査の橋渡しを行った。

2004年5月「道具小屋」設置

山ノ内配水池近くの土地を賃借、赤道(あかみち)整備用資材を手入れ、保管

2004年9月7日 韓国ウルサン放送の取材

韓国のトラスト活動の参考として取材を受けると同時に台峯を案内

2004年9月26日 なたさんのメッセージ

朝日新聞に「いっしょに歩かないか」と題し、「ぼくは月に一度、鎌倉の『台』という緑地を、保護したい人たちと歩いている。いっしょに歩かないか。」という書き出しで始まる、若者に向けてのメッセージが載る。

2004年12月16日 台峯保全が発表される

鎌倉市が台峯の保全を公表

2005年5月～2016年 台峯保全連絡会

現在は中断中だが、台峯保全に係ってきたグループが今後の緑地保全のあり方について話し合う場として設けられた。行政との窓口としての位置づけもある。

2005年6月1日 知事・市長 台峯を歩く

松沢神奈川県知事が「移動知事室」の一環として台峯を視察、石渡鎌倉市長も同行。将来県の補助金投入の可能性があり現地を見ることになった。現地の案内役をつとめた当会は、保全の決まった台峯を自然のまま残すよう要望

2006年4月 市の台峯「基本構想案」につき

連絡会として意見書を提出

2007年5月 北鎌倉の景観に関して意見書を

鎌倉市に提出

2007年8月 高校生ボランティア台峯来訪

台峯の手入れ活動に高校生4名を2日間受け入れ、山道のササ刈り、畑の草取りや土手の草刈など体験してもらう。

2007年10月北鎌倉の景観に関し理事長ら

二人が公聴会で公述人として意見陳述

2009年5月13日 1,354万円を市に寄付

山ノ内西瓜ガ谷緑地保全基金として、鎌倉市長に理事長らが手交



<石渡市長に寄付目録を手交

本誌 No.21,2009/11 より>

2009年9月「緑の基本計画」に対して市へ意見書提出

2009年11月 市政功労者として表彰される

2012年2月 藤源治緑地の保全活動

建設常任委員会で理事が意見陳述

2012年～2013年 市の都市計画道路見直し方針に意見書を提出

都市計画道路「由比ガ浜-関谷線」に対し廃止を要請

2013年6月6日 初代会長 なた いなた氏ご逝去

2013年10月～2015年9月 市の都市マスタープラン評価検討協議会の委員に

「由比ガ浜-関谷線」につき反対意見陳述

2014年7月 市が「(仮称)山崎・台峯緑地実施設計(案)」発表

同年8月同案に対し当会は市へ意見書を提出。更に2016年4月「谷戸の池」関係につき意見書提出

2015年～ 北鎌倉駅協のトンネル保存運動集会等に参加、現在も継続。なお、2016年

8月11日 入口付近で剥落事故発生

2015年8月9日「なた いなたとフランス展」

軽井沢高原文庫に出口理事長出席

2016年12月「由比ヶ浜-関谷線」を歩く
都市計画道路 1000 分の 1 地図が入手
出来たため、B 区間を理事全員で歩く。

2017年1月～ 谷戸の池堤防改修工事に関
し、環境を配慮した基金のプランが取り入
れられる。浚渫工事に関し公園課と協議し
生態系への配慮を実現した。

2020年4月14日「山崎・台峯緑地」部分開園
2020年6月1日 朝日新聞の地域広報誌であ
る「鎌倉朝日」に、台峯緑地一部開園と、台
峯トラストの活動の様子が掲載される。

2021年9月23日 臨時総会にてNPO 法人
解散決議

2021年度「山崎・台峯緑地」全面開園予定

に案内を、また石原瑞穂会員による挿画付き
チラシを街角に掲示

・「山の手入れ」「歩く会」の前日、P7 参照
・ホテル観察会 毎年6、7月

・マツムシを聞く会 2009年以降毎年9月
・マップ作り 2006年より原則毎月2回、その後
「モニタリング」と改名して継続

・カレンダー作成 2008年以降 2021年用まで
毎年数百部発行。川上克己氏、池英夫氏の
写真を掲載。市内書店でも販売

・北鎌倉女子学園生徒を台峯に案内
コロナ禍の 2020、2021 年度を除き、毎年
課外活動として中1生徒を対象

【定例行事】

・総会 2002年～2021年 NPO 法人としての毎
年定例 (2020、2021年はコロナ禍のため書面
にて) および適宜臨時(2000年12月3日設
立、2021年9月23日解散、等)開催

・理事会 毎月第1日曜日に実施、理事と監事
により、全体方針や当面する諸問題への対応、
イベントなどの方針を決定

・「トラストの集い」 会員間の親睦を図る会
1999年11月14日 第1回 円覚寺白雲庵
2000年11月25日 第2回 円覚寺書院
足立管長記念講演
2001年11月25日 第3回 円覚寺書院
「ナショナルトラストと私」トラスト協会 北島
常務理事

2002年12月1日 第4回 円覚寺書院
2003年11月24日 第5回 円覚寺白雲庵
市より「みどり債」発行の経緯説明

2004年以降も毎年勤労感謝の日頃に円覚
寺帰源院、光照寺、または山ノ内公会堂で

・「台峯を歩く会」 毎月第3日曜、山ノ内公会堂
での説明後出発、P6 参照、なお「鎌倉朝日」

【その他イベント等】

・台峯保全を訴える企画 北鎌倉女子学園で
2000年6月4日「なだいなだが語り青木由
有子がうたう 台峯の生命」

2001年5月1日「自然との共生(ともいき)を
語る」 なだ会長・竹内市長・今井通子

2002年6月2日「台峯の生命の叫び」
リンボウ先生が語り青木由有子が歌う。

2003年6月29日「小津安二郎と美しい日本
語、そして北鎌倉」山内静夫ほか

2004年6月6日「台峯の生命の叫び」
青木由有子が歌い工藤直子が読み語る。

・一般向け機関誌「北鎌倉の風」の発行
1999年3月 創刊

2000年11月 第2号「台峯の生きとし生ける
ものの四季」

2001年11月 第3号「自然との共生を語る」
2003年3月 第4号「命育む台峯にあそび、
まなぶ」

2005年6月 第5号「台峯をゆく」

・街頭募金 入会勧誘と募金活動。1999年から
2004年まで毎年春秋実施。 以上

.....
「台峯を歩く会(山歩き)」を振り返って
.....

毎月同じコースで台峯を歩く会を(前身の任意団体時代から数えて)22年間も続けられたことは、皆様のご協力があったことで、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。今、NPO 法人としての基金の解散にあたり、振り返ってみると、とてもユニークな集いだったと思えてなりません。

最初は開発が迫る台峯を多くの方に知っていただく目的で、作家のなだいなだ先生の呼びかけで始まった行事でした。

市民活動の手段として始まった「歩く会」が、台峯の保全後も長く続いてきたのはなぜでしょうか。

季節を問わず毎月歩くことで、台峯への愛着が深まったこと、なだいなだ先生を囲む人の輪がとても和やかだったからではないでしょうか。この会には、三代目理事長の石黒ひで先生をはじめ、当初から著名な方々も多く参加されていました。草や枝をかきわけるようにして共に歩いた日々、どこの誰であろうとも、一緒に台峯を歩けば気楽に話せました。なだ先生が寄稿された文章に「ともに肩を並べ歩く」という言葉がありますが、一緒に台峯を歩くと不思議な解放感があり癒されると感じた方も多かったようです。

山ノ内公会堂に集合し、なだ先生のお話を聞いてから出発したことも、この会の良さでした。出発前に室内でひとときを過ごすことで、なだ先生のお話をうかがう楽しみもでき、初参加者も人の輪に入りやすくなったようです。実際、今でも初参加者の方をお見受けしますし、その多くが口コミで広がっていることはとても素晴らしいことだと思います。

「台峯を歩く会」は、市民活動の集会でもなく、自然観察の同好会でもなく、不思議な雰囲気の会だったと思います。約20年という歳月は、多くの出会いと同時に、別れもありました。今は亡き皆様のお人柄が会の雰囲気を作り上げてくださいました。台峯を歩くことが人生の一部になった方も多いことでしょう。自然の中を共に歩くと人は癒される、室内ではなく自然の中で語り合うことは素晴らしいこと実感しました。

台峯が“緑地”として保全されたということは、かつては地域の人たちの耕作地であった台峯が、自然豊かな場所として新たな価値で見直され、地域の生活の場から、都会人の癒しの場へと変わったということです。“癒し”とは何かを考えると、趣味でもレジャーでもなく、自然(地域の歴史)を大切にするために、自分も役立ちたいという想い、家庭や職場を超えた、新たな人間関係が求められていると感じます。なだ先生の文章に、「梅はいつでも見ごろです」という一節がありますが、これからも「台峯はいつでも見ごろです」、「ともに肩を並べて歩きましょう」と言い続けていきたいものです。

久保 廣晃 (理事)

~~~~~



〈ツリフネソウ〉

.....  
「山の手入れ」を振り返って  
.....

20年ほど前までは、台峯の谷戸の池周辺は歩くことが難しいほどでした。毎月の「台峯を歩く会」に備えて、草刈りやぬかるんだ散策路の整備などが必要だったのです。当時、開発予定地とは言え、散策路沿いの手入れは可能でした。今は故人となられた小林京子さんから呼びかけがあり、歩く会に参加している人を中心に山の手入れ作業が始まりました。

基金の「山の手入れ」は、田畑や雑木林など、里山の保全作業ではなく、散策路の確保を目的にしながら自然保護も考えたのがユニークでした。参加者はアウトドアが好きな人ではなく、老若男女の一般人です。ほとんどの人は普段、長靴をはくこともなく、刈込バサミを持つこともない人たちでした。短時間で終わること、能率を考えずゆっくり手作業をすることで、様々な人が参加しやすくなりました。つたない？作業でも、一木一草を大切にするような作業につながり、自然を守るためには最適でした。毎回使う道具を基金で用意してもらえたので、初めて来た人も手ぶらで気楽に参加できました。道具の手入れの良し悪しは、作業者の士気に影響します。倉庫を借りて道具の手入れもしていただいたことは、この活動が長続きしたことの要因でしょう。

「山の手入れ」は「台峯を歩く会」のためにやるわけですから、作業結果を毎月確認することになります。自分たちが歩く場所を手入れすることで、作業が自然に与えている影響がわかり、台峯への愛着が深まったのではないのでしょうか。同じ場所に通うと、どこに何が咲いているかお馴染みになります。それらの多くが道沿いの草刈りなどの影響で生育が違ってくことに気づきます。自分たちの散策路は、愛情のかけ方次第で

自然が豊かになるのが少しずつ分かってきます。それは、収穫物が得られる田畑の耕作とは少し違った感覚、おもしろさかもしれません。ここに、都市住民による新しい里山との関わり方があると感じます。

台峯の保全が決まった後、どのような緑地にすべきか、基金を含む8団体が集まり話し合いました。一般市民の意見も公募したところ、里山的な保全が台峯の自然保護につながると考えていた私たちとは異なり、現状の手つかずの自然を大切にしたいという意見が多くありました。そこで、「実質的里山保全」という表現で、部分的に里山的な環境を復元できるよう、行政や他の市民団体と話し合いを重ねました。現在の台峯緑地の整備の元になった「基本構想」・「基本計画」・「実施設計」はこうして作成されたのです。

散策路以外にも、畑跡地の手入れ、貴重な生物が生息するオギ原の保全活動などを続けてきました。一般に、自然を観察する人と里山の作業をする人は最初から別で、あまり交わることはありません。基金のように、歩くことと道の整備が目的であった活動が、知らず知らずのうちに自然を守る行為に発展してきたのは珍しい事例ではないでしょうか。「歩く会」にしても、「山の手入れ」にしても、良い意味での素人集団であったことに基金らしさを感じます。

なだ先生は、オニヤンマの幼虫が脱皮してトンボになる様子を目撃されて、「台峯は観光地のような美しさや大自然があるわけではないが、生き物が生きていることを実感できる場所だ」と語っておられました。そこに行けば、虫や鳥や植物の息吹が感じられる台峯でありたいと思います。今まで培ってきた基金らしさを大切にしながら、「山の手入れ」を続けていきましょう。

久保 廣晃(理事)

台峯の自然の現状

活動が始まってから20年以上になりますが、台峯緑地のおよその変化と現状について報告します。

① 谷戸の池

市内では貴重な水辺の環境です。農業用の溜め池でしたが、放置されて半世紀以上になるようです。数年前に大規模な整備工事が行われましたが、これまでの会報で報告したように、多くの問題点を抱えたままです。ヘドロの堆積をどうするかなど、開園後の管理方法が未定です。外来種の魚(ブラックバス)が駆除されましたが、ここ数年で特定外来種のミシシippアカミミガメ(通称ミドリガメ)が侵入し増えてしまいました。貴重な貝が生息していましたが、現在はほとんどいなくなりました。陸封型のヨシノボリ(ハゼの一種)は、稚魚が見つかったので(一般的なヨシノボリの可能性もあります)まだ健在かもしれません。

② ハンノキの林

市内でも3か所しかない貴重な林です。以前は、鎌倉市もその貴重性に注目し、ハンノキ林のために、湿地化を進めるべきか、乾かした方がよいのか意見が分かれました。種をまいて増やす試みもなされました。この20年の観察では、日照が大きく影響すると思われます。“谷戸の池”周辺では、公園課による斜面林の一部伐採(崖崩れ防止のため)や、台風による崖崩れ、そして“谷戸の池”の大規模な工事で日照が良くなりました。その結果、一部のハンノキの生育が回復し、幼木も育っている現状です。ハンノキの老化などの心配はありますが、幼木が育っていく様子を見守りたいと思います。

③ 湿地

市内でも貴重な湿地(休耕田)です。湿地の乾燥化が心配されていましたが、この20年、あまり進行せず、むしろ、日照不足によるアシ原の衰退が目立ちます。斜面の林が大きく育ったことや湿地周辺(畦の跡地など)の木が育ったことが原因です。最近では中断していますが、畦の跡地の木を整理することも必要でしょう。ハンノキ林と同じく、台風などによる倒木が湿地のために幸いするかもしれません。ミゾソバやツリフネソウ、ハンゲショウなどの湿地の植物は、アシほどには日照不足の影響が出ていないようです。カナムグラなどのツル植物の繁茂を抑える作業を継続したことが良かったようです。

④ オギ原

北側の湿地はオギ原(ススキのよく似た植物)になっていますが、ササやツル植物(カナムグラ、クズなど)の侵入で衰退していました。基金でササやツル植物の除去し、冬季にオギの刈り取り作業を行って日照確保に努めたところ、近年、オギの生育が良くなってきました。現在、基金ではオギ原の作業を中断していますが、有志が作業を継続しています。オギ原に生息するカヤネズミ(近年、神奈川県東部では絶滅に近い状態)は、今年も巣が見つかったのでまだ生息しています。オギ原の衰退を防ぐことが保護につながります。

⑤ 水路

台峯の水路は、ゲンジボタルや市内では数か所しか見られないマシジミ(淡水性のシジミ)が生息する貴重な環境です。今年もホタルの観察会でゲンジボタルの健在を確かめ、モニタリング調査でマシジミが無事生息していることを観察しました。定期的に水路にか



ぶったササや枝を切る作業が必要ですが、ここ数年は工事の影響で中断しています。ぜひ保全作業を再開したいところです。

#### ⑥ 散策路沿いの植物

“谷戸の池”から山崎小学校にかけて、谷戸底部の散策路は、基金の活動が始まった当初から観察と作業をしてきました。野草が同じ場所で数十年も生育し続けている様子や、ササを刈ることで野草が増えることがわかってきました。会員が現場で採取したタネから増やした野草(ホトギス)が定着したり、心無い人にランを盗られたり、人間次第で散策路の自然が変わる様子を見つめてきました。ナンシギセルのように近年見られなくなってしまう野草もあるので、野草や木々を増やすためには、草刈りと工夫が必要です。これからも丁寧な作業を続けたいと思います。

#### ⑦ 畑跡地の手入れ

台峯の尾根には、現在でも確認できる畑の跡地が、尾根に2箇所、斜面に2箇所(1か所は放置されて笹藪になっている)残されています。そのうち“老人の畑”と呼ばれる場所には、マツムシやショウリョウバッタモドキなど市内ではほとんど見られなくなった貴重な昆虫が生息しています。“老人の畑”周辺のススキ、チガヤなど特定の植物に依存しているので、管理の仕方次第では姿を消してしまう可能性があります。今のところ、マツムシやショウリョウバッタモドキは健在であることを、基金の「マツムシを聞く会」で確認しています。近年、基金で力を入れているのが斜面にある畑の跡地です。ササやツルを刈り、斜面も手入れして、ススキが生える草原のような状態にしたいと思っています。

#### ⑧ 整備工事の影響は少なかった

会報でお伝えしていますが、心配された湿地への影響は今のところ感じられません。ヘイケボタルが生息する湿地も健在です。

#### ⑨ 手入れに参加している団体

現在、台峯では基金以外に3つの団体が活動しています。そのうち2つは基金の会員も参加している会です。それぞれが行政と連絡をとりながら、地域ごとに作業しています。

1.「台峯緑地保全会」は、台の地元の住民を中心に、里山の復活を目的に活動しています。台峯の尾根部の林の伐採、下刈り作業が中心ですが、畑跡地の草刈りをしています。台峯以外にも六国見山など、北鎌倉周辺を広く手入れ作業しているようです。

2.「フレンズ オブ カマクラ・台峯」は、基金の会員や梶原の地元の人たち、“パタゴニア”(アウトドア用品店)の人たちが参加され月2回作業しています。竹林、畑跡地、散策路沿いを主に手入れされています。

3.名称はありませんが、オギ原の手入れをしているグループもあります。基金の会員が参加しています。毎月数回、金曜日にオギ原のツル草除去、冬季のオギ原の刈込作業をしています。

その他、瓜ヶ谷緑地(台峯と源氏山の間にある斜面緑地)で活動している団体もあります。地元の町内会を中心にしたグループです。

かなりの面積がある台峯緑地の自然を良好な状態で保つには、基金の作業(月1回)だけでは十分とは言えません。多くの会の協力がこれからも必要ではないでしょうか。基金は、“谷戸の池”周辺の散策路や湿地など谷戸底部の作業が主体になると思われます。

久保 廣晃 (理事)

.....  
当基金を支えて下さった方々(1)  
.....

準備期を含め 20 数年に亘る活動を振り返ると、個性溢れる方々を思い出します。

作家であり精神科の医師の なだ いなださんを理事長にいただき 1998 年「北鎌倉の景観を後世に伝える基金」は発足しました。

それ以前の 1993 年になださんが「台峯の自然を守る会」という市民団体に寄せた一文「風景も文化財です。」が基金の基本理念をあらわしているように思います。

「…風景を守ろうといった時、それを文化と考えるすべての人の財産を守ることになります。台峯の緑が守られることを祈ります。」

また理事長を引き受けるにあたって、「守ろうとしている緑地(台峯)を歩くこと」を条件とされ、保全を主張するだけでなく守るべき緑をよく知ることの大切さを穏やかに語られました。

一方設立の種をまき、水をやり、環境を整えた小林京子さん(事務局)を忘れるわけにはいきません。卓越した判断力、行動力と穏やかなお人柄が、この基金のもう一つの顔であったことは異論のないことと思います。

2004 年 12 月鎌倉市は台峯緑地の買取による全面保全を決めました。ここに至るまでの活動、即ち各種意見書の提出、街頭署名と募金活動、台峯を広く知ってもらうための講演会とコンサート企画・運営、市議会議員との話し合いなどは小林京子さんの努力、忍耐ぬきには語れません。

噂では、緑地保全に対しはっきりしない議会の対応に対し、傍聴席からヤジを飛ばした？とのこと。台峯の手入れでは白いブラウスをカナムグラ(つる性植物、草木染の材料になる)の汁で茶色に染めながら頑張っていました。源氏物語を愛するたおやかさと、何としても緑を守り抜くという強い気概を並び持つ得難い人物でした。身を削って活動されましたが、保全決定を目前にして亡くなりました。

その後事務局を担ったのは和泉あきさんです。作家、教育者であり、当然ながら会報に薫り高い文章を寄稿。事務局としての役割だけでなく小林さん同様「歩く会」と「手入れ」にほとんど毎回参加されました。今では散策路の歩きにくい傾斜地に階段がつけられましたが、そこを歩くたびに「和泉さんがここを歩けたら良かったのに…」と残念さと懐かしさがこみあげてくるのです。

北鎌倉をこの上なく愛する石黒ひでさんもまた忘れるわけにはいきません。ヨーロッパ、アメリカ、日本でライピニッツの哲学などに関する多くの論文を発表した哲学者です。コロンビア大学では生涯かの地にとどまるように遺留されたにもかかわらず、若い時から馴染んでいた北鎌倉の高台の土地に住みたくて帰国したのです。アンティークのお店で出会った黒いはしごに合わせて、自宅の設計を依頼する自由な発想の持ち主です。

なださんに請われて副理事長になり、のちに第3代理事長も務めました。2002 年にはヨーロッパで知遇を得た映画関係者、パリ市議会議員など小津安二郎を敬愛する文化人に呼びかけ、彼らから保全を要望する手紙を受け取りました。その手紙と松竹の監督山田洋二さんからの保全を願うメッセージを、なださんと石黒さんは当時の石渡市長に手渡しました。活動が新しい広がりを見せた瞬間です。

基金に参加したことで、ここで書ききれないほどの多くの見事な方々と知り合えたことを感謝します。

基金は緑地保全を目標に設立されました。けれども保全が決まった後も会員の皆様は高い理想を掲げ引き続きモニタリング、手入れ、歩く会を支持し続けてこられました。任意団体になっても引き続き「ともに肩を並べて」歩いて行けたらと願っています。どうぞよろしく。

市川 節子(正会員、元理事)

.....

## 当基金を支えて下さった方々(2)

.....

およそ前半期の、女性理事を中心に元理事の市川節子氏が当欄(1)で記述してくれたので、他の方々につき記します。

その前に、小生が初めて出席した 2006 年頃の理事会は大変賑やかものでした。理事ではない正会員も出席、理事より大きな声でより多く発言されるし、また複数の議論の輪が同時に広がるので、聴取も理解も容易ではありません。でも、当時それだけの情熱をもって皆さん活発に理事会に臨まれたと解釈し、ここに記しておきます。

そんな中で終始冷静でいらしたのは森泉定男氏で、NPO 法人設立以前の準備段階で委員長を務められ、その後も理事として基金の運営を担って下さいました。山ノ内の町内会長を長く務めた関係から地元、特に北鎌倉女子学園とは良好な関係で、学園の講堂を無料で使わせてもらったりしたことも。現役中是一部上場会社の役員でいらした経験から基金のまとめ役として貴重な人材でした。

吉野功氏はもと当基金の監事でしたが、なださんの後を継いで第 2 代理事長に。NPO という当時新しく誕生した概念に関心が強かったようで、NPO の全国大会にも基金を代表して出張されました。台峯緑地の基本設計が確定したのを機に 2008 年 2 月理事長を退いた後も理事としては留まり、2009 年 5 月市長に基金 1,354 万円を寄付する際には石黒理事長とともに手交されたのでした。

しかし、やはり女性陣のご活躍は大変なもので、その存在感は大きかったと思います。既に触れられている石黒ひで氏ら以外にも、新植幸子氏はご高齢の石黒第 3 代理事長

のご面倒なども見ながら、積極的に発言し、また行事に参加されたのですが、そのパワーに他の理事が追いつけない感もありました。その後基金を離れてご自分の会を作り、今も台峯の整備などして下さいと伺っています。

当欄(1)を記述下さった市川節子氏は会報や新規のカレンダーの発行、美しいデザインのHPや基金案内菜など、新しい風を吹き込んで下さいました。ご自分でも台峯を守る会を主催されていたので、さぞや大変だったことでしょう。現在は当基金の理事を退任され、ご自分の会を運営されています。

他にも多くの方が理事として基金を担って来て下さいましたが、紙面に限りがありますし、また現役の方については仲間褒めを避けたいので、ここまでとします。

また、理事ではありませんが当初から正会員の石原瑞穂さんは、初代の基金案内菜や毎月の行事案内チラシ等に優しく美しい画を提供下さいました。感謝しております。

しかし、当基金を担って下さったのは、やはり会員の皆様や支援を頂いた諸団体ということでしょう。会員は最盛期には 600 名以上となり、今も 100 名ほどの方が残られています。

これらの諸氏、諸団体からは会費やご寄付、またカレンダーや機関誌の購入など、まず資金面で支援いただきました。また 275 回にも及ぶ「台峯を歩く会」はじめ「山の手入れ」、「集い」等に参加いただきましたが、これらを通してこの会を支えて下さったのです。

NPO 法人としての当基金の解散後も、後継の任意団体が多少形は変わっても従来の催しを続けるとのことですので、皆様にはどうぞ引き続きのご支援をお願い申し上げます。

本田 隆史(理事)

.....

## 台峯の四季

.....

山崎・台峯緑地の保全活動を目的としたトラスト「北鎌倉の景観を後世に伝える基金」が設立されたのは1998年10月のことです。

2001年9月には、情報発信の場として基金はホームページを立ち上げました。

その後、当基金をはじめ多くの保全グループと協働の活動が実を結び、鎌倉市による当該土地の買収が決定したのは2004年です。

さらに台峯の基本設計、基本構想、基本計画、実施計画、実施設計まで市との共同作業が続けられた結果、2016年に完了し、その後「谷戸の池」の改修工事となります。

一方、基金の活動情報を中心にお伝えしてきたホームページを「台峯をより身近なものと感じ取ってもらいたい」との願いから、2013年1月から表紙に季節感を感じ取ってもらえる写真を掲載することにしました。

掲載する写真は前月の25日から当月の15日までに撮影したものとし、気がつくと2021年8月までの間に684枚の写真を掲載したことになります。

撮影するため台峯に出かけた回数は8年間で400回を超えています。

写真は撮影後、コメントを添付し基金の理事である島田さんに送付し、編集後にホームページへの掲載となります。(島田さんの協力には本当に感謝です)

前置きが長くなりましたが、過去8年の掲載したものから特に印象に残った5枚にコメントを添えてご紹介します。

撮影にあたって留意したことは商業主義的な発想を拒否したことです。なぜなら台峯保全活動の運動は商業主義との戦いでもあったからです。

写真1. 雪に覆われた台峯山頂付近  
(2018年1月23日撮影、表紙に大きく掲載)



前日夕方から降り始めた雪は一晩中降り続きましたが、明け方には止み絶好の撮影日和となりました。北鎌倉在住の地の利を生かし、早朝の写真を撮ることができました。私以外に訪れる人もなく、満喫出来ました。

写真2. ガガイモの種

(2020年2月5日オギハラで撮影)



毎年2月は写真の題材探しに苦勞します。

当日は朝から曇り空で、北風の強い日でした。夕方になり日も陰り始めた頃、オギハラを中心部に入り込んでゆくと、突然目の前に、場違いの妖精のようなかたまりと出会いました。

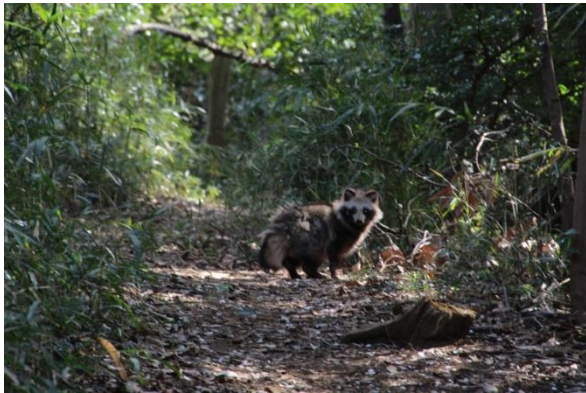
しばらくその神秘的な姿を見つめていると、かたまりは吹き始めた北風と一緒にツルを離れ、いずこかに飛び去っていきました。

キョウチクトウ科のツル性の多年生草でガガイモであることを 帰宅して知りました。

凍える手でシャッターを切った我慢の1枚です。

### 写真3. ホンドタヌキ

(2021年3月24日谷脇の尾根道で撮影)



台峯でタヌキと遭遇したのは2回目です。

前回は2019年の4月オギハラで夫婦の狸でした。

今回は尾根筋の道幅1メートル弱の1本道での遭遇です。

こちらが気づくと、相手は13メートルほど先でこちらを凝視していました。

小声で声をかけてみましたが、もちろん反応せず見つめるだけです。

お互い10メートル程の距離を置いて見つめ合うこと2分、突然タヌキは後ろ向きになって駆け出し姿を隠しました。

タヌキと人とのにらめっこ、奇妙な体験をしました。

### 写真4. ヤマザクラ満開

(2020年3月24日谷戸筋で撮影)



鎌倉は古来より桜の名所として知られています。実際に段葛や鎌倉山には桜並木が存在しますが、少し違和感があります。

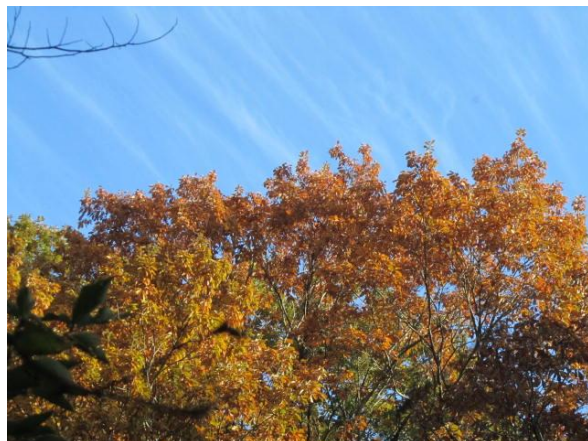
山麓に目を転じると、奈良の吉野山のような感じさえします。そこに映える桜は、ソメイシノではありません。

主役はヤマザクラとオオシマザクラです。写真はヤマザクラですが、幹の太さ3m以上、丈は10mを超える巨木が占領しています。

開花期は背が高いため見落としがちですが、満開時の桜は見事です。

### 写真5. コナラとクヌギなどの紅葉

(2015年12月7日北鎌倉女子学園脇道で撮影)



台峯の紅葉は行楽地の紅葉とは違い時期も12月に入ってからとなります。

谷戸に点在する落葉樹は種類も多く、ハゼ、イロハカエデなど赤く紅葉するものもありますが、ケヤキ、コナラ、クヌギなど、黄色く紅葉するものが中心となります。尾根筋の道や湿地帯は別世界に入り込んだ感じさえします。

クワ、ミズキ、クス、エノキなどの紅葉も見逃せません。

谷戸の奥に入り込んだ木々の紅葉は我々を別世界に誘導します。

写真と文: 望月眞樹(理事)

カメラ: キヤノン EOSX7

## 皆様からのご寄稿文

皆様からの寄稿文を募ったところ、20年間にわたる思い出などを中心に語った文章を頂戴しました。中には長文となったので、縮めさせて頂いたりしたものもあります。

なお、掲載順序は紙面などの都合によるもので、不同です。

### 瓜ヶ谷の棚田

毎月の山歩きで、北鎌倉駅前の交番を回り風情ある小路を曲り抜けると、梶原に向かう道に出ます。そして程なく右側に田んぼが現れ、もう少し台峯に向って歩くと小さな棚田が現れます。

此処の棚田は、鎌倉時代から地元の亀井家が代々守ってこられた市内でも貴重な田の一つです。今年も田植えが行われました。作業は小生も参加させていただきましたが、例年苗代に必ず稗(ひえ)が混じって生えてきます。其の取除き手間は結構大変です。台峯の付近からは古代の土器も発掘されている様ですし、この厄介者の稗も「遥か時空を越え古代よりの使者では、、、」。小生の勝手な思い込みかもしれませんが。

台峯と一体の大切な景観である棚田、生物を育む畔に四季折々咲く野草、後世に大切に残したい場所であると思うのですが、皆様もきっと同じ思いと信じます。

山歩きは、新たな担い手により、今後も続けられるでしょう。次回が今から楽しみです。

出口 克浩(理事長)

## 30年の重み

1992年5月北鎌倉女子学園講堂に於いて「台峯の緑を守る会」主催で「開発説明会」が開催されました。今から30年ほど前に成ります。

当時の台峯周辺は、農村の趣と台峯の自然がそのまま残された貴重な地域でした。私もその場で会員と成り、反対運動に参加し、現在に至ります。

様々な意見の食い違いによる対立等々を乗り越えて、「台峯の緑を守るために結集しました。

当会も1354万円をトラスト基金より鎌倉市に寄付しました。

今後とも台峯が開発されることはありません。

30年の重みを感じながら、台峯を歩いています。

望月 晶夫(理事)

### 20年前の思い出

約20年前に小学生の娘と家内を連れて初めて台峯を訪れました。

確か新聞で当基金発足の記事を読んで、「へえ、まだそんな自然が残っているのか」といった気持ちからでした。

地図も持たずにさまよったので、配水池を出てしばらく歩くとまた配水池に戻ってしまい、辺りにいた道路作業員に笑われて、娘はいたく恥ずかしがっていました。

再出発し、今で言う「老人の畑」で眺望を楽しみましたが、北鎌倉女子学園に下りてしまい、「谷戸の池」などには寄れませんでした。

いずれは娘の生んだ子供も一緒に3世代で池の畔を散策したいと思っています。

匿名希望(会員)

---

## 感謝の言葉

---

この基金は幸せな会でした。保全を願って立ち上げ、希望通り緑地は保全されました。(とても稀有な事例です。)

その後会員の方の支持を受け、保全後にその緑地の自然を後の人たちにどのように残すか、試行錯誤しつつ作業する機会をいただきました。(もちろん私たちはその勤めを果たす覚悟を決めなければならなかったのですが、)

この機会に久保廣晃理事への感謝の言葉を申し述べたいと思います。なださんの思いを実践してきたこの会の学術的な中心にいたのが久保さんです。NPO 法人になる前(1997年)から台峯を歩く会のガイド役を引き受けていました。動、植物、時には地層や歴史にまで及ぶ幅広い知識と、生き物に対する愛情あふれるコメントに多くの参加者が引き付けられました。毎月自ら作成した「台峯を歩く会〇月資料」を配布するなど、久保さん主導のこの魅力的な歩く会が23年もの間続けられてきたのです。

また2005年台峯の自然をどのように保全するのかを話し合う「台峯保全連絡会」が発足しました。(保全に関わった8団体とオブザーバーとして市の特命課が参加)久保さんが様々な意見を調整し、台峯保全計画として具体化できるようになりました。

なださんはサン・テグジュペリの言葉を引用して私たちの向かうべき道を示していました。「我々は地球を先祖から受け継いでいるのではない。子どもたちから借りたものだ。」

様々な意見が飛び交う難しい状況のもとで、久保さんはじめ私たちはこの言葉に励まされ保全決定後も昔の里山に戻すだけでなく、新たな里山の価値を創造しようと努力してきました。ありがとうございました。

市川 節子(正会員)

---

## 小さな変化を見つけて

---

台峯の自然とその周辺の街並み、小さな変化を発見することが多かったです。

台峯自体は当会の活動を通じて谷戸の池の工事や、散策路の改修などを皆様と共有しながら経過を観察してまいりましたが、地元住民ではない分、台峯の現場に行く道中の変化を感じてきました。定期的に自然や地域の変化を観察する貴重な機会になりました。山の手入れや観察会、理事会の会合などで毎回、小さな変化の兆しを発見することが出来ました。

台峯の中で谷戸の池の工事があつたり、作業用の道が出来たりなど、会としても情報を共有しているようなものもあれば、街を歩くとあるお宅が空き家になって、賃貸や売却になったり、造成工事が行われたりして長い年月の中で着実に変化を続けていました。

最初に台峯に来た頃と思い返せば結構変わったなというのが自分の印象です。これからも台峯とその周辺の変化に寄り添っていきたいと思います。



<道具小屋近くの当時、お花畑 2010年3月>

文と写真:小谷 一夫(理事)

---

## 台峯と関わることに

---

法人の解散に際し文書をと頼まれましたので、過去の資料を改めて見返しておりましたところ、およそ10年前に書いた文書が出てきました。今から見ますと時間的には丁度折り返しの頃となります。私が当法人に関わるきっかけとなった経緯が書かれておりましたので、終わりにあたって原点を振り替える意味で改めて掲載いたしたいと思えます。以下の「 」内は当時の文書(一部抜粋・省略)です。

「私が、NPO 法人北鎌倉の景観を後世に伝える基金(以下、「台峯トラスト」)の活動に参加するようになって、およそ10年が経過しました。参加の年に長女が誕生し、長女の成長とともに関わったこのトラストは、私にとって、印象深いものとなっております。

活動に参加することになったきっかけは、私が公認会計士として藤沢で事務所を開設していることによります。事の発端は、当時の台峯トラストの理事であった方が、記者として、日本公認会計士協会の総会を取材された際、当時のスローガンであった「社会貢献」を聞き、台峯トラストに貢献願えないかと協会に申し入れたことによります。それが、業界の神奈川県会に伝わり、当時、副会長で藤沢市の代表監査委員をされていた徳江陸先生から私に監事を引き受けてくれませんかとの打診になりました。

そのころ、湘南地域の公認会計士は、徳江先生を中心に2つの目標を掲げてそれを実践に移そうとしておりました。1つは、当時、湘南地域の工場撤退が相次いでいたため、それに変わる新産業を創出するための諸施策(相

談業務、経営セミナー、ビジネスコンテスト、ベンチャーファンドの設立・運営など)を行政と力を合わせておこなうこと。もう1つは、当時、制度として成立間もない NPO 法人を公認会計士としての専門知識を用いて支援することでありました。台峯トラストからの要望は、この後者の目標に合致するものでありました。そのため、私は、すぐにお引き受けいたしました。」

参加の年に生れた長女は成人となりました。小学生くらいまで山の手入れやホテル観察会などにも家族で参加させていただきました。台峯の自然が守られたことで、子供達にとってもいつまでも懐かしい風景を見ることが出来ることは大変うれしいことでもあります。

なだ先生をはじめ既に鬼籍に入られた方々も含め、理事の方々、会員の方々の地道な活動と努力に敬意を表するとともに感謝をいたしたいと思えます。

林 雄一郎 (監事)



＜林監事がご家族でヤマザクラをお手植え

2012年3月＞



---

## 台峯に寄せて

---

台峯の活動を知ったのは「みどりショップ」で見かけたチラシ。歩く会への初参加は 1999 年 4 月のこと。山桜は満開、野鳥の声もにぎやかで全てが新鮮でワクワク感満載！

案内してくださる久保廣晃さんは毎月、その日に会えそうな鳥、昆虫、樹木や野草、花などの写真付資料を下さいます。実物を見ながらお話も伺えて臨場感一杯です！久保さんが豊かな自然への深い造詣を惜しみなく私達に分け与えて下さるお姿が NPO 法人の台峯活動に長年惹きつけられている大きな要因のように思えます。

歩く会では老人の畑で当時事務局の小林さんが美味しいキャンディを振る舞って下さり、この習慣は今でも小田原夫人をはじめ会員たちがうけついでいます。

NPO 法人の冠を外す機会に懐かしい方々との出会いやシーンを振り返りたいと思います。

台峯の保全活動の理念を「守りたい土地への理解と愛情を育てる」と提唱されたなだいなだ先生もそのお言葉どおりお元気に楽しそうに参加されていました。ある日「ヤブサメが鳴いている！」と久保さん。でも鳴き声は高音で初心者には聴き取りは至難の技、なだ先生もがっかりのご様子。そこへ誰かが「野鳥の会ではヤブサメの声はバロメーター、聞き取れなくなったら引退だって！」次の会に参加されたなだ先生の手にはま新しい集音器が誇らしげに握られていました。

この頃のなだ先生を囲む楽しい出来事は池英夫さんが優れたカメラアイで捉え会報にも掲載されました。池さんは台峯への温かい眼差しと超人的な撮影技術を駆使、沢山の人々に愛された「台峯のカレンダー」の最終号

まで素晴らしい写真を提供されました。

事務局の和泉先生は「おばあさんをこんなに険しい所へ連れ出すんだから」との言葉とは裏腹に滑る急斜面を蔓を掴みながらこともなげに登られ、ヤナガリ作業で傷ついたツリバナのか細い木に絆創膏を巻いて保護されたり。また文学者らしい繊細な感性と美しい言葉で自然の移り変わる姿を会報やチラシに載せておられました。

夜のイベント、ホテル観察会と鳴く虫観察会には特別感が溢れています。久保さんと望月弟さんが事故のないように案内して下さいます。特にホテル観察会は夜の森に分け入る稀な機会、闇の深さと夜空の不思議な明るさ、蒼い草原、出会った鳥、夢か幻のようなホテルの舞、どの一瞬も強烈な印象！ 闇に慣れる視力も不思議でした。

鳴く虫観察会で初めて耳にしたのはクズの茂みでの美しいカンタンの鳴き声。老人の畑ではマツムシの「チンチロリン」を聴きその姿も見せて頂きました。クサヒバリや他の虫たちの鳴き声に満ちた草地の賑やかさにも驚かされます。

また保全活動の手入れの複雑さを実感したのは翌年のこと。クズの茂みを刈り取った所ではカンタンの声はなくなる一方、ススキの刈り取り具合で心配されたマツムシはその後も無事で生息域も少し広がっているようです。草が茂って裸地の減った畑地ではエンマコオロギの声は少なくなりました。どれも共生を探る息の長い課題のようです。

長い年月に渡って会の存続と活動を支えて下さった理事の皆さまに改めて心からお礼を申し上げます。台峯を愛する皆さまとこれからも見守っていきたく願っています。

石原瑞穂(正会員)

## 台峯の大切な小さい自然

台峯の歩く会に参加し、理事へと声をかけて頂いてからずいぶん経ちました。ただ自然の中を歩くことが楽しかっただけの立場から、その場所を「守っていく」活動に微力ながら参加できたことを誇りに思います。

寒い中咲く早春の花、春の新緑、夏の蝉時雨に樹液に集まる虫たち、秋の実りと紅葉、冬の小鳥たち。毎月同じ場所を通るからこそ実感できる季節の移ろい。そんな台峯をゆっくりゆっくり歩く事で今までなら見落としていたような小さなことにも目が行くようになり、木の葉1枚ですら愛おしく感じるようになりました。

台峯に限らず、こんな当たり前の風景は実は微妙なバランスの上であり、守らなければ壊れかねない貴重なものになってしまっていることが、残念でなりません。

かつて当たり前だった身近な風景が、当たり前として続いていくように活動をしなければならぬ現実と向き合いながら、これからも台峯に関わっていきたいと思います。

植木 よう子 (理事)

~~~~~



♪きれいな野菊 うすむらさきよ<ヨメナ>

ヤマナラシ

台峯を代表する樹といえばハンノキなのだろうが、ヤマナラシもまた捨て難い。

何年か前まで「老人の畑」から「谷戸の池」へ降りる途に大きなヤマナラシが1本あった。

「風情」とか「風雅」という語の成り立ちは知らぬが、風になびいてそよぐ柔らかな葉を持つ樹が好きだ。風が吹くと、樹が全身で♠(スペード)型の葉をひらひらと手を振ってくれて、葉擦れの音を立てるのである。

やや湿った裸地に生える、ポプラの仲間のパイロット・プランツだそうで、まだ周りに樹の生えていない頃に丹沢辺りの山地から種が飛んできて真っ先に芽生えたものらしい。

しかし緑が立て込んでくる中で樹勢が衰え枯れてしまったが、周囲にひこばえを生んでくれていた。その中から当基金で移植した5本のうちの1本だけが「老人の畑」に根付き、更に沢山のひこばえを育てている。いつの日かヤマナラシ林となって、「山(全体を)鳴らし」てくれたら、皆さん困るだろうか。

風媒花で雌雄異株らしいが、久保理事に何とも鎌倉では他に株が見当たらぬとのこと。

当地のひこばえだけではなく、横浜の公園などにある株が異性であって、夫婦の子孫を他の地にも撒いてくれたら、なお嬉しいのだが。



写真も:

本田 隆史(理事) <横浜長浜公園のヤマナラシ>

・・・2021年2月から9月まで・・・・・・・・・・

「台峯を歩く会」と関連活動の報告

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

○今回の会報は特別号となる為、このご報告も、2021年2月より6月迄と致します。6月の歩く会で通算272回、22年8カ月と成りました。

一昨年、台風の直撃、谷戸の池工事による谷戸底への進入禁止。そして更に、コロナウイルス問題です。私達の「歩く会」も、鎌倉市よりの指導も有り、4カ月に渡り山歩きを中止しました。

2021年1月迄は、既に報告しておりますので、今回は2021年2月より6月までの報告と成ります。

「コロナウイルス問題」は、これから収束に向かうのか？又は第5波を迎える事に成るのか全く予想が付きません。今後とも充分注意をしながら、「台峯の自然」と係り合いを持ち続けたいと思っています。今後とも皆様のご協力よろしくお願い致します。

2月21日 第268回

神奈川県は新型コロナ緊急事態宣言下にあります。前日までの状況も検討し、無理のない範囲での開催を決めました。工事関係も終了しており、晴れ、22度の最高気温が予想され、一気に春本番と成りました。

ホトケノザ、ヒメウス、タネツケバナ、タチツボスミレ、ウグイスカグラ等の春の花が咲き始め、谷戸の近辺では、ヤマアカガエルの卵塊を見る事が出来、その様子を張り出した木の枝から見ているカワセミに会う事が出来ました。15名の皆さん感激の様子でした。

また、早くもウグイスが鳴いていました。

・観察のテーマ

1. 常緑樹 大木に成る常緑樹 タブ、スタ

ジイ、アカガシ

2. 常緑樹 照葉樹の観察 ヤブツバキ、イヌツゲ、カクレミノ

3月21日 第269回

議論は有りますが、3月21日で緊急事態宣言が全面解除と成り「台峯の春」を満喫する予定でした。ところが天気予報は「終日風雨共に強い」との事で中止と致しました。

4月18日 第270回

昨日の天候がウソの様な快晴の天気と成りました。

4月20日より神奈川県は「まん延防止等重点措置」の適用を決めています。そんな中での「歩く会」でしたが、2名の新人を含め12名の参加者と一緒に早めの春を楽しみました。東瓜ヶ谷の田んぼでは、シュレイゲルアオガエルの大合唱に迎えられ、散策路沿いの土手で、キンランを見つける事が出来ました。

・観察のテーマ

1. 新芽が目立つ樹木 アカメガシワ、タブ、シロダモ、スダジイ
2. 新緑の中のつぼみが目立つ樹木 ミズキ、クワ、ハナイカダ
3. よく目立つ樹木の花 ヤマツツジ、フジ
4. 地味でも目立つ植物 ウラシマソウ、ホウチャクソウ、ツルカノコソウ、ヤエムグラ

5月16日 第271回

新型コロナ緊急事態宣言は、本日より全国9都道府県に拡大し、政府の手の打ち様の遅れが指摘されています。天気予報は、曇り時々雨。中止も考えましたが、予定どおり実施しました。神奈川ネット関係の3人も参加され、皆さんも満足されたと思います。

シュレーゲルアオガエルと日本アマガエ

ルの合唱は素晴らしいものでした。

・観察のテーマ

1. 初夏の白い花 エゴノキ、ウツギ、スイカズラ、ノイバラ、マルバウツギ、ハコネウツギ
2. 異常発生しているキアシドクガ
3. 聞けたらうれしい夏鳥 ホトギス

6月13日 ホタル観察会

毎年4～5回に分けてホタルの観察を行っています。今年も6月6日の観察時には70頭位でした。6月13日観察会時は、多くて150位を予想しました。ところがなんと総数で200～230頭目にする事が出来ました。ここ7～8年では最高です。参加された20名の皆さんも感激されていました。

6月20日 第272回

天気予報では午前中まで雨が残る予報でしたが、曇りを期待し決行しました。結果はOK。但し、新型コロナウイルス感染症対策ははっきりしないまま。第5波も懸念されています。そんな中での山歩きでしたが、モリアオガエルの卵塊を発見する等、梅雨下の台峯を堪能しました。

また6月13日のホタル観察会の結果報告と9月20日配水池横集合のマツムシを聴く会の案内をする。

・観察のテーマ

梅雨時に刈り残したい植物 梅雨は草刈りの季節だが残したい植物も有ります。

草刈りに対して再生力の強い植物と、弱い植物が有ります。

コ克蘭、ホタルブクロ、ヤマユリ、ホトギス、シダ類

望月 晶夫(理事)

○272 回まで望月(晶)理事が記述されたので、以後分を市宛の報告等から編集担当が纏めました。

7月18日 第273回

7月16日関東地方は、いきなりの梅雨明け宣言、猛暑の中での山歩きとなりました。ミーティングでは、散策路と仮設路の問題点につきご説明しました。

・観察のテーマ

1. 樹木の花 ネムノキ、カラスザンショウ
2. 日当たりのよい場所に咲く花 ヤブカンゾウ、ヒメオウギズイセン、セリ
3. 木陰に咲く花 ミズヒキ、ダイコンソウ、ムラサキニガナ、ウマミツバ、ヤブラン

8月15日 第274回 酷暑のため中止

9月19日 第275回

台風一過の好天気の中、17名のご参加。またツルボ、キツネノマゴ等野草観察。サンバは1羽のみ、渡りの練習中か。

・観察のテーマ

1. 9月に咲く花は昆虫に、実は野鳥に役立つ タラノキ、ヌルデ
2. 日当たりの野草 ツルボ、キツネノマゴ
3. 9月に目立つ野草 キンミズヒキ、センニチソウ
4. 湿地に咲く野草 シロバナサクラタデ、ボントクタデ、ツルマメ

9月20日 マツムシを聴く会

16名がご参集。星や月、富士山のシルエットなどが美しく、集合場所の管理棟脇あたりは樹上からアオマツムシが喧しい。目当てのマツムシの他、クチキコオロギ、ツヅレサセコオロギなどの音がよく聴こえる。 以上

・・・連載最終回・・・・・・・・・・・・・・・・

鳥の名前 第9話 マーリンの話

(エピローグの続編)

・・・・・・・・・・・・・・・・

最終号が出るとのことで、前回に予定していたマーリンの話を書いていただきます。

ハヤブサの仲間の鳥、コチョウゲンボウの英名をマーリン merlin と云います。チョウゲンボウは鎌倉でも時々見ることができますが、コチョウゲンボウはまだ見たことはありません。イギリスと日本は共に旧北区に分類されているように、両国で見られる鳥は共通したものが多いのです。しかし、同じ英語圏でも新北区に属するアメリカの鳥は日本とは違う鳥が多いのです。また長い名前がついている鳥はその国の珍鳥で、その反対に名前の短い鳥はその国で日常よく見られる鳥であることは、どこの世界でも共通です。英名が merlin と云うワンワードの名前から、イギリスでは日本より容易に見られる鳥だと判ります。鳥の名前に興味を持つ前、私はマーリンとは、イギリスの昔話にでてくる魔法使いの名前だと思っていたので、改めて辞書を引いて調べたら、merlin が鳥の名前、Merlin が魔法使いとなっています。

Merlin とはイギリス人にとっては忘れられない、5世紀から6世紀にかけての、史実と伝説に織りなされた古い歴史「アーサー王物語」に活躍する魔法使いの名前なのです。

マーリンは悪魔ではないけれど、それに近いインキューバス{夢の魔}の息子であったのですが、母親が信仰深く悪魔にならず、魔法使いになったとされています。幼い頃から魔法を使って、人々を驚かせ、また敬服させます。アーサー王の伯父ペンドラゴン、父のユーサー王、そして王と、三人の王の最高顧問として、千変万化、自由に姿を変えて活躍します。円卓の騎士の円卓の準備をしたり、有名な

ストーンヘンジなど、マーリンが魔法を使ってアイルランドから石を運んで作ったことになっています。最後はこの魔法使いも自分の愛人ヴィヴィアンに、自分を閉じ込める魔法を教えまい、彼女に裏切られ、自分の魔法で自分自身が封じ込まれ、人々の前から姿を消してしまいます。

普通の英国人は、マーリンと云ったら、鳥の名前か、魔法使いか、どちらを先に考えるか？と云う実験を、甥のデービット ブッシュが来たとき、試してみました。彼はルイス ブッシュの息子で、鎌倉生まれ、幼稚園までは日本、それ以降の教育はイギリスのエリートコース、クライストチャーチからロンドン大学を卒業し、英語で教育を受け、なんとか日本語を忘れないようにと努力しているバイリンガルです。私にとって義兄に当たるルイス ブッシュは長く鎌倉に住み、1974年の離日にあたっては市長から感謝状や「友情の鍵」を贈呈される(右下写真)など、日英の架け橋として活躍しましたので、ご存知の方もいるかも知れません。このデーちゃんが我家に来たとき、日本語の会話の中で、だしぬけに紙にMERLINと書いて、「これ、どういうこと」と尋ねました。すると、彼は魔法使いの方の話を始めました。そこでイギリスの大きな鳥の図鑑を取り出してきて、マーリンの絵を見せました。すると、「ああ、この鳥、僕もイギリスでよく見たよ、日本でも見られるの？」という様に、会話が続き、そこで私は「どうして魔法使いが鳥の名前になっているのかなあ」



「広報かまくら」1974/8/1

活動記録

(2021年3月～2021年9月)



〈コチョウゲンボウ〉 Wikipedia より

(Public domain, U.S.federal government)

と尋ねると、彼は鳥の絵を見ながら、「このへんの羽の具合が子供の時に見た漫画の魔法使いマーリンの顔の髭と似ているからかなあ???判んないよ、何かで調べてみてよ」という具合に会話が進みました。要するに「話の流れの中で、マーリンは鳥の名前にもなるし、魔法使いの意味にもなる」という結論となり、会話している双方がともに、マーリンと云う言葉を二つの意味で無意志のうちに理解しているので、単語だけ独立して、どちらを先に連想するかという問いには、答えがないのかもしれませんが。

鳥の名前よもやま噺、殆ど全ての内容は、どこかの本の子引きか、孫引きでしたが、さて今回、最終回、最後に、オリジナルな体験を書くことが出来ました。ご愛読有難うございました。

久保 順三

一当会報は当初前号をもって連載分の掲載を終了の予定であったため、著者も「エピローグ」をその号に執筆されましたが、今回を最終回として「エピローグの続編」を皆様のご高覧に供します。(編集担当)

1 市みどり公園課との打合せ

4/15, 5/21, 6/11, 6/22, 7/28

2 臨時総会(解散の決議)

9/23

3 理事会

3/7, 4/4, 5/2, 6/6, 7/4, 8/1, 9/5

4 台峯を歩く会

4/18, 5/16, 6/20, 7/18, 9/19

5 山の手入れ

3/20, 5/15, 7/17

6 モニタリング

3/7, 3/20, 4/4, 5/2, 5/15, 7/17, 8/1, 9/5

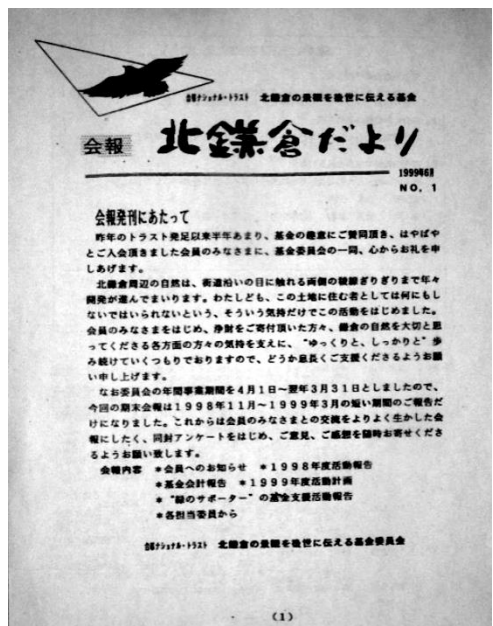
7 ホタル観察会

6/13

8 マツムシを聞く会

9/20

~~~~~



〈本誌第1号 1999年9月〉

…連載最終回……………

## 台峯の周辺②

## 震災

……………

大正12(1923)年9月1日の関東大震災から間もなく1世紀となる。本誌の、またこの連載の最終回として、「台峯」そのものからはやや遠ざかるが、将来のために触れておきたい。

筆者の亡父は当時まだ11歳だった計算だが、震災の話を生前に時々してくれた。

地震後鎌倉地区の我が家から北鎌倉へ米を買い出しに遣られた父が崩落した亀ヶ谷坂を通り抜けねばならないのだが、頻発する余震のため頭上から更なる岩や土が時々崩れ落ちてきて怖かったという。

七口と言われる切通しをはじめ鎌倉地区の出入り口はみな崖崩れや津波等で容易に通行できず、地区内で配達など物流が途絶える中、やむなく小学生が危険を冒してわざわざ隣町まで買い出しに出掛けたのだろう。

古来東西北を丘陵に、また南は海により外敵から守られるため、幕府がここに置かれたとされる。出入りのルートは震災後新設や拡幅・平坦化等もなされているが、一旦大地震により通行不能となれば、今日でも外からの物資や情報が届かず、また外へも出られずに、陸の孤島となりうるのだ。

震災後、例えば丘陵外側の建長寺内に当時居た葛西善蔵は東神奈川まで歩いて7日には汽車に乗れた(『一種の寂寞とした感じ—震災記』)が、鎌倉地区の御用邸(現御成小学校や市役所立地)隣に住んでいた石橋湛山が鎌倉駅から無蓋貨車に詰め込まれ初めて上京できたのは12日にもなっていたことだ。汽車が通じるまでの間、物資不足の中で、「共産主義と

はこんなものかと思うほど、近所隣の人が惜しげもなく色んな物を持ちよって」互いに助け合った、という。(『湛山回想』)

この1,2年はコロナ禍で少し様子が異なるが、それまで鎌倉は外国人を含む観光客で大変な混雑だった。いずれ元に戻るだろう。市によると、以前鎌倉地区への「延入込観光客数」は年約2千万人に達していたそうで、単純な日割りでも5万人強となる。もっともこの概念は、例えば大仏と八幡宮と1日に2か所の名所を訪問した客は2名とされてしまうのだが、他に観光客相手商売の通勤者などもいようから、土日祭日はやはり最低数万人が来訪するものと思うべきだろう。この地区の住民人口は約46万人なので、凡そ倍にも膨れ上がることになる。

これ程大勢の人々に向けて非常時に、たとえ「近所隣」が「持ちよって」も、交通・物流・通信等が回復するまでの何日間か、衣食住や医療、また近年重要性を増す情報をこの地区で賄うことができるだろうか。

鎌倉地区のみならず市全域をカバーすべき市役所機能をどこにどう置くか、また台峯をかすめる計画道路の是非などを検討するには、かかる視点も重要と思われるのだが。

以上は筆者の個人的意見です。当欄11年の永きお付き合い、有難うございました。

本田 隆史 (理事)



〈関東大震災  
巨福呂坂崩落  
鎌倉市中央図  
書館蔵〉

.....

## 緑の洞門

.....

この洞門が通行できなくなって、はや6年にもなります。危険だからとして尾根を開削し、自動車も通れるようにトンネルを廃止しようとする開発派の動きでした。

「北鎌倉の景観を後世に伝える」べき当基金としては、当初よりこれを大きな問題として捉え、理事長自らが、反対運動を始められた「北鎌倉の洞門を守る会(北鎌倉史跡研究会)」の運動に参加してまいりました。

同会の共同代表(当時)鈴木一道氏には3年前の基金「会員の集い」にお越しいただいてお話を伺いましたし、また当会報も2015年3月号以降ほぼ毎号にわたりこの問題を取り上げてきた次第です。

皆様のご理解、ご支援のおかげで、文化財としての価値が再評価され、2016年市長も開削から保全への方針転換を表明しました。しかし、その後地権者たる円覚寺および雲頂庵からの反発もあってか、市長は「広報かまくら」に両者宛のわび状を掲載するあり様で、その後大きな進展は見られません。

「～守る会」の方も、そのHPは今年3月の「花見ツアー」を最後に更新されていないようです。けれども、理事長によると、次の2点を中心に地道な反対活動がなされているとのこと。

- ・先般の選挙で選ばれた新市会議員あてに個別の陳情活動を継続
- ・市の不作為につき横浜地裁にて損害請求住民訴訟中。10月20日結審予定

今後については予断を許しませんが、NPO法人としての解散後も、任意団体として当基金は引き続きこの問題に関わって行くとしています。どうかご支援ください。

(編集担当)



<北鎌倉ホームにて> 鈴木正一郎 1967/2/3

鎌倉市中央図書館蔵

会報44号 解散記念・最終号

発行日 2021年10月31日

発行者 特定非営利活動法人(清算中)

北鎌倉の景観を後世に伝える基金

事務局 〒248-0011 鎌倉市扇が谷3-2-12 本田方

HP [www.kitakamakura-daimine-trust.org](http://www.kitakamakura-daimine-trust.org)

写真 望月眞樹・小谷一夫・本田隆史

### 編集後記

蕪村の俳句が好きなのですが、その編年体の俳句集の巻頭に真っ先に掲げられているのが、

尼寺や 十夜にとどく さねかづら

1737年22歳での処女作のようで、この尼寺とは東慶寺とのこと。縁切寺の同寺にいる尼のもとに、ゆかりの男から、そろそろ還俗だねとさねかづら(モクレン科のつるくさ、茎の粘液を髪の手入れに使った)が届いたのは、皮肉にも世間に念仏の聲が響きわたる、お十夜の日であった、、、マセてますね、さすがに名人。

尼さんにはお目にかかりませんでしたがお寺の一角にある山ノ内公会堂で、長年「台峯を歩く会」の事前説明や「会員の集い」などを行ってきました。お貸し下さった町内会に感謝しています。有難うございました。

(『蕪村全集』第一巻 P9 講談社)